

したにもかかわらず、関東軍はわれわれ開拓団を放り捨てた如く、なんの援助もせず、勝手に引揚げたのは同じ国民として腑に落ちず、たいへん残念に思う。

十一年の満鉄生活

埼玉県 松 永 三 郎

昭和九年四月、本籍地福岡県直方市より渡満。同年十月、満鉄入社。遼陽医院に勤務。十七年四月、鞍山医院に転勤。十九年四月、黒河医院に転勤。二十年五月、召集令状のため、黒河に家族を残し、黒河近くの部隊に入隊し、六月初旬一か月の行軍でチチハル市街の部隊に移動。

あの忘れることのできない八月十五日の終戦詔勅を営庭で聞きました。十八日に、ソ連兵が武装解除のため進駐してくるとのことで隊内は騒然としたものでした。

十七日、隊長命令で、満鉄出身の隊員八人に除隊命令が出されました。のちほどわかったことですが、鉄道業

務に協力をさせるとのことでした。

除隊後、チチハル市内の満鉄独身寮にまぎれこみ、軍服を焼却し、社員とともに行動をとることになりました。チチハル在住中、かつての戦友達が市中を通り、ソ連領へ連行される姿を盗み見たときは、たえがたい思いで一杯でした。

九月の終わり頃、黒河より集団南下した家族の消息を求めやっとの思いで新京の駅前、満鉄社宅に雑居中の家族と再会できました。妻は七か月の身重でした。数日新京に滞在し、無蓋車で集団で奉天に南下し、ヤマトホテル前の義光街五階建アパートに落ちつきました。一室三世帯の雑居生活、厳寒の中の一冬、まったく筆舌につくせぬ辛苦の連続でした。二十一年七月、コロ島より引揚げ船で博多港に上陸し、焦土と化した福岡市内の現況を見、涙を禁じ得ませんでした。

日本の家に着いた時には、六百円だけで、帰れば、父は死に、年老いた母が子どもを連れて働いていました。学歴はなく、技術はなく、年は多いし、働く所はなし、一生懸命で田畑を作りました。供出は部落でいわれたと

おり供出し、ほとんど供出させられました。供出は安く、配給は高く、品物は切符制ですが、切符はあっても闇で売られて、私共には買えません。引揚げ者に配給はあってもお金がかかります。山口県では無料で、いろいろな毛布などあり、広島県ではおなべ、それもふたなしで有料一回だけ、日本は不公平でした。食べる物は不十分で、親はすこし食べ、子どもに食べさせました。食べ物十分でないため、乳は出さず、闇で米を買い、重湯を飲ませました。栄養不足で、病気がかり、医者から子どもを放ってはいけません、気をつけるよう注意されました。働かなければ食って行けず、病弱の子どもにしました。

現金収入のタバコ葉を作り、売り、その金は借金に返し、また借金生活、そのタバコも作られなくなり、収入がなくなりましたが、税金はかかって税務署がきて、税金を出すようないわれ、収入がないからといえ、食っていきただけ収入があるだろうと、仕方なく高利の金を借りてすましましたが、かえす金はなく、利子がつくし、とうとう家屋敷田畑みんな売りました。困った後に売る

ので、いわれるとおりの値で売り、金のかからないトーフ製造をして、生活しました。今では、子どもも皆一人前となり、少しずつ送金してくれます。年金もあります。トーフ製造は七十三歳でやめ、幸福に暮らしています。

消えぬ想い出

山形県 伊藤もと

隠密召集出立の日

昭和二十年五月十七日。夫三十八歳の誕生日である。そしてこの日は召集令状を受け出立の日でもあった。私は妊娠二か月、しかし戦地に行く夫に後顧の憂いなきようにと報告しなかった。真心こめた精一杯の手料理を食べ、今生の別れと覚悟しながらも、靖国神社で会いましょうと笑顔で送り出した。

終戦の日

正午に重大放送の回覧板を受け奉公班幹事（町内会長）である私は、班員を我が家に集め、思いがけない敗